

打忘れしが先づ宇兵衛が大病よて旦夕も迫りたるよしを
悲し高島が相も變りらす懇ろよ世話する事を喜び稍々
内藤が上又語り及ぼさんとなせし折取次の女中入りて
廣子又向ひ女津端さんと云ふ方が眞蹟を尋ねて入らつ
しやいました鶴田の稍々思案の後鶴貞子、和女の家へ歸
つて私が往くのを待つてお出で老爺が大病とあつて何
事もさし置いていかなくちやアならんから夫れも高島へ
使を遣つて高津へ呼んで置くが好いと言畢つて女中又對
し鶴其お客さまを此方へ藤森君二人の暫時次の間へ避
けて居やう

第三十回

鶴田藤森が坐を避け貞子が高津へ立歸へる跡引違へて入

來る津端廣子も向て恭々しく一禮し津先刻は誠よ失禮
を致しました扱早速立歸り親父もお傳言を申しますとイ
ヤもうなか／＼眞實よの致さず飛んだ事を言出して又曰
を泣かすかと初の中の手ももなりませんでしたのだん
／＼委しく話すよ付けそんなら何故家へお連れ申さん我
々親子が現在居ながら宿屋へお置き申して宜いものかと
以ての外立腹其事もお勸め申した先さまでも御都合
があるから今日だけの宿屋へ泊り明日の尋ねて入らつし
やると宥めましても聞入れず年寄の氣忙しない今からは
非ともお迎へへ出してお連れ申すと願ひますの漸と留め
て私がお迎ひよ参りましたお疲れのある處へ誠よ恐入り
ますが何卒直と私の方へお引移りを願ひます 廣折角の



勸めながら何も左様いふ譯もないかん 津定めしお連さ
まへの御斟酌もございませうが其分り私からお連さまへ
願ひまして失禮ながら御一緒よ 廣お前の家で世話する
と云ふのかへ 津幸ひ二つ三つ空た座敷もございませうか
ら 廣へエ大層大きな家と見えるねへ 津先づあの邊で
の大きい中でございます 廣お前何して左様俄かよお金
持ちよなつたのかへ 津旦那さまから頂戴致した儘かな
資本で商賣を始め其後も損をしての度々御無心よ出ま
た私お疑ひのあるの御道理でございませうがナニニ商賣
人と申すもの一つ運が向きますと夫から先のことんく
拍子四年前横濱で西洋人の手代よなり其後退々信用を
受けて神戸の支店を一人で預かり少々金も溜めました折

柄商店の主人の鳥渡本國へ歸つたま、叔父の家を相續し
て再び日本へ渡る事が出来ないこと云つて夫限り商店を仕
舞ひましたから其時の分配金や自分の溜めた金を資本よ
して今でい當地の米商仲買立派な商人よなりましたのも
原はと云へば旦那さまのお蔭漸と御恩送りが出来るやう
よなりましたと何方もお在世なさらぬ始末日頃残念と思ふ
て居りますと處へ計らふ貴嬢よ廻會ひこんな嬉しい事い
さいません時よお宅の騒動の何云ふ譯でございませうか
廣あの時死んだの下女のお芳で妾の彼の晩居なかつ
たのさ 津へ左様でございませうか而して其後の廣
親父さんよお目よ掛つて家の騒動をお話し申したり何か
の事も相談をしたいと思いますと思つて長崎まで出掛けて行く

航海中も親父さんのお死なすつたどの知らせを受取途方
も暮て詮方なく妾の藝妓となりました津アノ貴嬢が藝
妓もそんな事と知りまじたら早速お迎ひも出ませう
ものも廣賤しい勤めをして居る中も妾が素性を委しく
知つて前借金を償ひ連れて歸つて下すつた方にお前が好
く知つてお出の津全体誰でございます廣子のきつと津
端を暇付け廣鶴田幸太郎といふ方さ津ぢやア彼の鶴
田廣お前がたの爲め又財産を取られて仕舞つた彼の鶴
田さんのお蔭をもつて妾の藝妓を退かされました津端の
面目なげ又頭を掻き津左様いふ譯なら尙の事鶴田さん
よも私から申譯を致さなくちやアなりません何かお嬢さ
まは一緒よ私の宅へ廣縁も由縁もない方でも鶴田さん

第卅一回

の正直で居らつしやるから妾の斯してお世話なる假令
以前の主従でも悪い事をする人の世話なるのにお断り
折角の思召だがお前の宅へ行きませせん

廣子が太く腹立てし体を見て津端の困り果て津モモお
嬢さま共事又付いてのいろく譯がございまして何も私
が鶴田さんの財産を奪はうの何のと思つて致した事での
ございませんア共事の宅へお越し下さつた上で鶴田さ
んよもお詫を致しますから兎に角又私を助けると思召し
て今晚か明朝堂島の方へお引移りを願ひます若し貴嬢が
お出下さいません年月苦勞をさせました一人の親今更何ん
ございません長の年月苦勞をさせました一人の親今更何ん

な事を致して遣りませうより貴國のお顔を見せて置きませう方が親父も宜しいんでございますモ、お嬢は文鶴田さんよの私からとんなよもお詫を致しますモ、お嬢さま「ト」言へども更にお答なく津端がいよ、もてあぐみたる折しも襖おし明け入来る藤森津端の席を避けて恭しく禮を施したる後再び廣子の方よ向ひ津、エ、此方が鶴田さんで入らつしやいますか 藤「イヤ私ハ藤森と申して今度廣子さんと御同船を致した者です 津「エ左様で私の龍野家よ御奉公を致しました津端源作定めし賞節のお嬢さまがいろく 又お世話さまよ 藤「イヤ此方でこそお世話よなりました」廣子の藤森よ會釋して 廣鶴田さんの藤高津の妹の處まで参りました」此後十分間の餘三人の

無言よて坐し居たりしが遂に藤森の口を開き 藤貴君の何ぞは商賣でも 津近頃の堂島で米商仲買を致して居りますす貴郎ハ長崎の方よお勤めでございますか 藤「ナ、久しく歐羅巴よ遊んで居つて今度歸りましたんです 津「ハ、ア歐羅巴多く何方へ 藤「英佛獨大抵歩きましたか中よハ倫敦巴里よ永い間 津「ハ、倫敦、夫ぢやア若し昨年まで日本へ商店を出して居りましたフランシーさんを存じでハありませんか 藤「フランシー、好く知つて居ます 津「實ハ私もあの商店よ久しい間雇はれて居ました藤森の暫し思案の後 藤若し昨年中フランシーから巻烟草入を貴君よ送りなしましたせんか 津「ハ、送つて貰ひました、好く貴君は存じで居らつしやいます 藤「フム、貴君でした



津黒い靴の 藤左様々々私と一緒に巴里で買求めた
から知って居ます藤森と廣子との思はず互ひ顔見合のせ
深く驚ろける体なりしが津端の夫と氣も付かず 津ッラ
ンッーさんも相異ならず達者又致して居りませうねへ
藤至つて健康です時よあの巻煙草入れを一度拜見する事
はなりませんすまいか實の彼の形の巻煙草入れを友人から注
文されて買ひたい〜と思ふ中出立が急なつてツヒ買
ふ譯又行かなかつたので近日彼の形を取つて誂へたいと
思ますから 津夫の何よりお易い御用でございますか實
の我々も不似合と存じましたんでさる人又遣しました併
し唯今でも持て居りますなら早速借りて御覽よ入れます
藤何時頃お譲りなりました 津左様な儘かな事の見

えませんが昨年の暮か當一月頃 藤共方の東京よお出で
すか 津今年の夏までの東京よ居りましたが其後當地よ
と言かけて廣子宛て 津先刻からお話しの内藤さんで
ございます廣子藤森の扱のと許り思はず笑を含みたり

第卅二回

清麗にして氣概ある鶴田幸太郎の薫陶又因りて人となり
たる貞子仇ども敵ども見るべき無恥非道の内藤次郎に一
鏡の合力を求むる事も盗泉の水を飲み嗟來の糧を食む思
ひ假令饑ゑても渴しても堅く心よ誓ひしが宇兵衛の病
氣お澤の心痛切なき家の有様を包むとすれど顯ゆる色
目をいつか貞子に見て取り親娘の者の不憫さよ過る日金
子を借受しの内藤次郎が思ふ壺情をかけ恩を被せ退引さ

せす手又入れんと三日又揚げず音訪るしを寄らす觸らす
待遇す苦しき今一度兄の許の便りを待つた其上での學そ
死なんとまで覺悟せしと思ひ掛けなく兄が歸坂顔見合の
した始めの言葉も永い問苦勞をさせたがもう是からの安
心と頼母しく慰められ貞子の蘇生の思ひにて再び高津よ
立歸りお澤も此由を告げて喜ばせ只管兄の來るを待て
り澤「マア、此んな嬉しい事があるものぢやアござい
ません、高島さんも賑か喜びなさるでございませう、真眞
實又浜華屋へ行くまでの夢中だつたよ、澤「左様でござい
ませうとも妾も何たかその付で親父又藥を吞ます事まで
忘れて居りました、而してその女中の夫人さまでございま
すかねへ、真そんな事を伺つて見る氣も付かなかつたの

澤「夫ぢやア内藤の事もお話しなさらず、真彼の事の
憎らしくて、仕様がなから少し話し出すと何れ高津
へ行つて委しく聞くと仰しやつたんで其儘よして歸つた
よ、澤「彼の人の事の妾から何も駄も旦那さま又申上げま
す、真早く入らつしやつて下されば好いねへ、澤「妾がお
迎ひ又参りませうか、真行違ひよなるといけなから今
少し待つて居やう話の中よ一挺の人力車の門口よ來り止
まり忙はしく庭先より入來る鶴田幸太郎、餘の事の嬉しさ
又涙のみ出て言葉も出さ立たり居たりうろつき廻はるお
澤「又向ひて物柔らかよ、鶴「何から禮を云つて好いやら先
夫の後廻はしとして親父さんの病氣の」と問ひかけて一問
又立ち入り宇兵衛が容体を篤と見をはり、鶴「ナ、大丈夫



だ、好い醫者を頼んで療治をする。と直又癒くなる。お澤の茶を汲んで座敷へ持ち來り、澤「サア旦那さま此方へ入らして下さいまし、マアお顔の色も思ひの外好くつてこんな嬉しい事はございませぬ。鶴高島、未だ來ないかね。真、もう程なく参りませう。鶴、何より話して好いか尋ねて好いか分らんが、兎又角私か歸つた上、少しも心配のかけんから安心して呉れるが好い。澤、何致して貴君がお歸りなりましたから、少しも心配な事なございませぬ、ほんとうにお嬢さまも羨も何んなお待ち申しましたらう。鶴、病人を相手又嘸いろく心配だつたらう。澤「ナ、貴君外又心配のございませぬが、アノ憎らしい内藤が不斷遣つて参つて、お嬢さまをおいぢめ申して、鶴「エ、内藤が今

此處へ出入りをするか、貞子の屢々何か言出さんとして、口籠り居たりしが、遂にお澤又向ひ、真澤、和女太儀ながら、モ一度使を頼んで高島さんまで遣つてお呉れでないか、澤「ハイ、畏りました。お澤が、いそぐとして立出し、跡鶴田の屹度、貞子又向ひ、鶴、何故内藤を寄付けるのかね、貞子の默然として、涙を流し、真澤、お寄付けんと申しますのを、妾がいろく宥めて、鶴「アノ和女が寄付けるやうにしたのか、真、ハイ、鶴田の少しく怒の体にて、鶴、伺いふ譯で、真、少し心配な事がございまして、何分來るなども申せませぬ。鶴「ナ、心配な事、貞子の四方見廻はしつゝ、真、多分嘘だらうとの存じますが、何か貴兄のお悪い事を知つて居るやう又申しまして、鶴

悪い事 眞貴兄が人殺しをなすつたつて 鶴私の人殺し、
ハア夫でいよく分つた

第 卅 三 回

二度目の使と行違ひ又馳付けし高島秀作送交り又一通
り旅中の勞を慰め留守の心盡しを喜び次は鶴田の金田直
哉が爲め多くの資本を貸與へられし事を告げ万づ商法の
都合を打合はせたる後突然意外の問ひを起せり 鶴高島
さん、君の妹の行方を探す事にもう断念したのかね高島の
不審さうよ 高妙な事をお尋ねなさいますね、何致してな
か 断念する譯よの参りません 鶴君の、アノ時殺され
たのを龍野の令嬢で殺したのを君の妹だと思つて居るか
い 高勿論左様、夫の私ばかりでなく誰しも左様と思つて

居ませう、尤も妹が自身手を下したか何かその邊の確と分
りませんが何もしろ私が鑑定で其晩泊つた客人が妹の
共謀者であつたらうと思はれます 鶴夫ぢやアその晩泊
た客を兎も角罪人と思ふのだね 高先づ左様ですな 鶴
ア君の妹も其密人と逃たのだね 高左様としか思はれ
ません、併し今日まで生きて居るか實に甚だ疑はしいんで
す、何故といふは男と女と二人逃亡をして殆んど一年も行
方の知れん事のない筈ですから 鶴私云はせると知れ
ない方が當然いくら探しても君の妹は此世界で逢はれ
まい高島の膝おし進め 高夫ぢやア妹の死ましたか 鶴
改めて断つて置くが残りす話をする前は驚いぢやアい
けないよ、アノ晩泊つた客人の外でもない私だ 高エ、



尊先づ静かき聞くが宜しい併し私に君の妹も龍野の令嬢
 も全然知らない人だつた恰ど其日の用も片附き堀切の菖
 蒲が好いといふ事を聞いたから早晝を仕舞て出掛け夕方
 ふらふらと歸る途中向島で白雨と逢ひ日の暮れかゝる車
 のなし實又困つて居る折から湯歸りで見へて通りかゝつ
 た人の即ち龍野の廣子さん大風雨と宿かる先もなく行惱
 んで居るのを見かねて家まで来て時間を待てと親切よ
 いつて下すつたから其言葉又従つて家又伴われ始めて君
 の妹も逢つたが段々雨風が強くなる道の暗し傘のさせ
 近所の人力車の出拂つて一挺もないと云ふんで據ろな
 く離坐敷又其晩の泊めて貰ひ翌朝早く歸りたいと思つた
 が母家の人が誰も起ないのでとうとう晝頃まで待たされ夫

でも起る人がない處から戸を明けて入つて見ると女中の
 居らず廣子さんの殺されて居た始末で其頃新聞紙の報じ
 た處も少しも違ひなかつた私直訴出るが至當だがマ
 ア考へて見てお呉れ假令何な事情でも婦人許りの處へ泊
 り加之人殺しの關係といわれるの在京の友人又對し
 ても實又面目なし夫又女中の行方さへ知れると自然事實
 も分る事だから先づ暫く知らん振りをして居やうと其儘
 宿へ歸つた處が其翌日の新聞又泊つた客人又嫌疑があ
 ると見えて居たので私も頗る當惑して早々東京を立去つ
 た跡も内々女中の行方を探がした然るや女中の現在兄た
 る君が家へ來ると云ふも實又妙な譯だから餘程情實を打
 明けやうと思つて居る中間もなく長崎へ行く事となつて其

儘も打過ぎたが不思議も長崎で墮着した一人の藝妓「泉
れ果て聞き居たりし高島此に至つて思はずも聲を放ち
高夫が妹でいありませんでしたか 鶴實又驚いた其時
までも殺されたと思詰めた廣子さん 高何廣子さん 鶴
左様、龍野廣子、夫からいろく 話をすると實又氣の毒千萬
なの、君の妹 高夫ぢやア殺されたの、妹殺したの、却
つて龍野の 鶴廣子さんと私も思つた、併し殺されたのが
君の妹よ、相違ないが殺した人の廣子さんでないらしい
高して妹を殺した奴の 鶴確どの知れんが先づ十中八
九まで見當が付いて居るから兎に角君の廣子さん又逢ひ
尙事情を問糺した上妹の敵を探すが宜しい 高夫ぢやア
長崎まで参りませすか 鶴ナ、廣子さんも伴ふて歸つて私

第 州 四 回

とかなし宿屋に居るから今夜君も逢ひして上げる

寧ろその事死んで呉れて居れば好いと主家への義理も平生
氣強く誇りしもの、實の老母が思ひ子よて彼の新聞の達
するや老母か歎き死よ果敢なくなりし事を思は万が一罪
を犯したる者が外ありて妹の助かる事もあらんかと且
暮心中祈念せしよ殺されし人の廣子ならず却つて妹と聞
く悲し高島の夢の如き心地よて其夜鶴田よ伴はれ涙華
屋へ行き、廣子よも逢ひ尙藤森鶴田より巻煙草入の事津
端が話聞け、聞く程妹の敵の内藤次郎と思ふよ付け直よ
も復讐せんす勢なりしを急いで、事を仕損ずる先づ静か
よと諫められ心ならずも恨を呑んで其宵一夜を過せし翌

花あやめ

朝打揃ふて朝飯任舞ひし後尋來りし津端が父の忠助な
り一同の次の間も避け廣子一人立進へし忠助の夫と見
るより老の目も涙せきかね 忠オ、お嬢さままだお嬢さま
跡の言葉もなき沈む 廣老爺達者だつたねへ 忠お嬢さま
ま夢でございませんか 廣定めし源作から委はしい容
子の聞いてお呉れたつたらう 忠委はしい承はつた事
承はりましたが何もお眼も掛る迄の眞實どの思はれませ
んでしたサア、お嬢さま方望唯今から私の方へ入らつ
しやつて下さいませぬと申さまがございませぬならお幾人でも
御一緒と悴奴も永の間旦那さまのお世話を蒙りましたよ
漸と唯今で他人さまの御厄介なならず一本立を致すや
うなりましたして是から御恩の送り時大旦那さまの事

花あやめ

今更悔んでも致方なございませぬから貴殿のお爲めと
子ども精一杯出来るだけの事を致さなくちやアなりません
ん何れも知らぬ老人の胸中察し遣りての不憫此上もなく
廣子の暗涙も咽びながら 廣折角の勤めだがマアお前の
方へ行く事の見合はずよ 忠ナ、何故でございませぬ、定め
し貴殿の思召で元々のやうな貧乏世帯と云かくるを急よ
打消し 廣「イエ、元々のやうな貧乏世帯なら妾も喜んで
世話よなるが左様でないから行くの否さ 忠何だか私
よのさつぱり解りませぬ 廣お前より解るまいが源作の
解つて居る筈忠助の涙ながら暫し思索も呉れたりしが俄
かと思付きたる体よて懐をかい探り一通の手紙取出して
廣子が前よさし置き 忠イヤもう餘まり嬉しいので何も

歎も忘れて居りました、伴奴から差上げた此手紙定めし是
ももお出を願ふやうと書いてあるでございませう「廣子の
澁々封おし切つて讀下すや否や太く驚き 廣父爺大變々々
々源作の警察へ行たんだよ」忠助の不審顔 忠へエ伴が警
察へ米商仲買などを致して居りますと好く警察へ呼ばれ
ます 廣「イー、左様ぢやアないよ自分で悪事を働いたこ
とを自首して出たんだよ 忠「エ、い、あの伴が悪い事を、而
して警察へ自首して出ましたあの警察へ 廣「マア此手紙
を御覽忠助のひつたくるやうと手紙を取り眼の先におし
付けたれといと見えかねる上涙よかすめバ 忠「万望貴
嬢お讀みなすつて下さいまし廣子の隣席なる鶴田高島へ
も聞ふるやう態と高く讀上ぐる文言

私事神戶又逗留仕の中水間傳助へ金子を用立て追々催
促仕の處或日内藤次郎殿被參水間の實際金子返辨致す
丈の資力無之然る又同人大坂の商人鶴田氏より金子の
預り證を一時金融の爲め受取り居い又付右の額面と金
高を増し水間も證書又連署して其許又渡し之をもつて
鶴田へ請求致されたくさすれば是迄借用の金子又何程
か餘分のものも添へて渡す事も出来其身も分配又預る
べしとの相談宜しからぬ企どの存い得共自分貸出し
金子取戻し度一心より内藤どのを代人として訴訟を起
し遂に夫が爲め鶴田さま身代限り被致い場合又立至り
い跡よて私の貸金三千圓の外又二千圓の禮金を受け殘
額二万餘圓の内藤水間兩人よて分け取り又仕由然る

又鶴田さまのお嬢さま御懇意にて此上もなき御親切な
おん方と承り且つ夫が爲めお嬢さま宅へも御越し不
成下老父が手前唯今と相成り申譯無之いまし私右の
趣警察署へ自首仕り内藤水間かたり取りの金子も鶴田
さまへ御返し申上り様取計は又付何卒私の罪お許し被
成下老父不憚と思召し是送の通り御厄介又預り様偏
へ又御願ひ申上り乍憚鶴田さまへ可然御断り被成下
度餘のお處刑を受け放免の後直々お詫可仕返へずく
も老後短き老父の上宜しく御願申上りあらくも
龍野お嬢さま
津端源作
本文の次第尙委細お嬢さまよりお聞被成下御詫の程呉
々奉願ひ私五千圓持参警察署へ悪事の趣自首仕り之

也 共尙宅へ金子夥多有之の間決して不自由の無之
父上様 源作
第卅五回
津端源作が置手紙を見て廣子の太く驚き且つ憫みの心さ
へ起りければ忠助を勸めて先づ堂島なる宅へ歸へしたる
後鶴田藤森高島も件んの手紙を示してかくと協議最中
霹靂一聲深く人々を驚かしめたる内藤次郎が何處より
か開出しけん藤森の涙華屋よ來泊せる由を知りて尋來り
しこと是なり
鶴田廣子高島の三人の周章狼狽て次の間又匿れ飛んで火
よ入る夏虫の内藤次郎の夫ども知らず女中又導かれて入

来れり扱藤森と互ひよ普通の口誼を述畢りて後内併し
僕が此方又居る事の意外だつたらうねへ藤ナニ薄々承
知して居つた定めし此方の好い事が多からう内別段是
と云ふ好い事もないが所謂鳥なき里の蝙蝠で東京から見
ると業務上の都合も好くて藤夫の結構内時又君の何
時頃まで此方又留まるねへ藤今日も立ちたいと思ふ
て居るが少し用事があるから夫を片附けた上で歸京じや
う内お閉があるなら久しぶり何方へか御案内したいが
首の廻り又早捕蠅かけられし事も知らぬかと藤森の心可
笑しく藤有り難う内大坂がお否なら西京へでも出掛
けやう藤何れ其内内マア君久し振りだから好いちや
アないか藤用を片附けん間は何となく氣掛りだから仕

舞つた上ゆつくり遊ばう藤森が待遇方何か打解けぬ處あ
るより扱の鶴田が噂を聞きしかど内藤のおし量り内君
今度長崎へ立寄つたかね藤ム、鳥渡内鶴田君の長崎
又居やアしないか藤鶴田の大坂又居る筈だ君の知らん
か内實の鶴田君も商法上で失敗して昨今の居先が分ら
ん誠又ハヤ氣の毒な譯さ内藤の藤森が爲め尙委細又問掛
られんを恐れければ急又話しを轉じ内時又此方の用向
の是非君でなくてならん事かね僕の處も書生が四五人
置いてあるから何でも命令で遣らしたら好からう藤君
が書生の手を借るより實の君自身又願ひたい内へ僕
よぢやア何を訴訟事件で藤左様訴訟事件で内宜し、
何んな事件か知らんが僕屹度骨を折るよナニ大抵困難

花 家 め

な事でも何か斯か勝てるものさ 藤是非骨を折つて貰ひたい 内受合つた併し民事かね刑事かね 藤僕此道の不安案内だが先づ刑事よ發告して附帶の私訴を起すが順だらう 内フム大分仰山だが一体原告の何處の誰だね 藤森の微笑しつゝ 藤寧そ本人よ逢つて貰つた方が好からう 内早晚本人よ逢はなくちやアいかん 藤そんなら此處へ呼出さうか 内此處よ來て居るのかね 藤左様 内夫ぢやアお目よ掛つて委しく聞かう斯く答へ畢るや否や隔ての襖さつどおし開き次の間より立出たるの鶴田高島の人なり内藤も流石よ驚いて顔色を變じたるがじつと胸を推鎮めつゝ 内イヨ一鶴田君よ高島さんば機嫌よう誰かと思つたら吃驚した藤森君も洋行をして大分人が悪く

花 家 め

なつた僕實際訴訟の依頼人が居るのかと思つたのさハ、、藤別よ君を欺しんせん全く此二人が訴訟の依頼人だ 内ナニ訴訟のシテ被告の 鶴被告の君が承知の答だ責めて此際でも男らしく振舞つて貰ひたいね 内僕よ何の事かさつぱり分らんが兎又角事件の要領を聞きたい 鶴詐偽取財原告の鶴田幸太郎被告の内藤次郎水問源助及び津端源作内藤のからくど打笑ひ 内申戲も程々よしたまへ尤も前の訴訟で負けたのが悔しくバ控訴でも上告でも勝手次第ですれバ好い夫又何ぞや詐偽取財僕の名譽よ於て聞捨ならん鶴田藤森も同じく一笑よ附して答へをなさりしが此時高島の奮然として進出で 高私の方も依頼したい 内へエ君が 高私の方の殺人罪で

す原告の高島芳が實兄高島秀作被告人の内藤次郎内藤の
五體盡く震へながら内失敬な事をと言去て立上らんと
する時早くも津端が自首よりて警察官の手配りをなし
一手の浪華屋へ闖入して内藤次郎を縛めたり
捕縛の後内藤の如何ともして罪を逃がれんと試みしが
津端の自首水間が白狀遂に力及ばずして伏罪し私訴も思
ひのまゝ原告の勝利となりて家屋其外財産に至るまで大
方の再び鶴田の所有を復し其中廣子高島の充分の取調を
なしてお芳が爲め殺人罪の告訴を起し津端が巻煙草入の
證據より次第に糾問の端緒を得て遂に罪狀發覺し内藤の
重き殺人罪をもつて絞罪の申渡しを受け水間の詐偽取財
の刑期中最重の處罰に該り津端の酌量すべき事情あるが

上自首いよ／＼罪を減じ徴しまでの刑を受けて日ならず
放免せられたり
内藤がお芳を殺せし事の人々の怪しみ疑ふ所なりしが其
裁判宣告書よ云ふ處を見れば内藤の平生より深く廣子の
容色も迷へるのみならず當時負債整理の爲め龍野大佐へ
金子借入れの事を申込みたれど聞かれずされば廣子を手
又入れて年來の望を達し一方は其縁の糸をもつて大佐
が心を繋ぎ得んと望み屢々廣子に婚姻を求めたれど堅く
拒み刺へたく恥かしめられしを怒り雷雨晦冥の夜又紛れ
て闇中忍び刺殺したる後人違ひなりし事を悟り大いよ
驚いて家内隈なく探がせしも廣子を得ざりしより今いお
芳をもつて廣子と見せ置き片時よても詮議は暇取らせ其

問ふ東京を去らんが爲め無慘よも首を切つて池の深水
 へ沈めたり云々
 此後鶴田の高島よお澤を娶いせ津端と二人を手代頭とし
 ていよく盛んよ商業を営み数年の間よ大坂屈指の紳商
 となり金田藤森を無二の親友として交り妹貞子を藤森よ
 嫁がしめ更よ金田の媒介を得て自身ハ廣子と婚姻を行ひ
 初生の男兒をもつて龍野家を相續せしむる事と定めみど
 りの色深き縁を此よ結遂げたりとぞめでたし

花
あやめ終

花あやめ

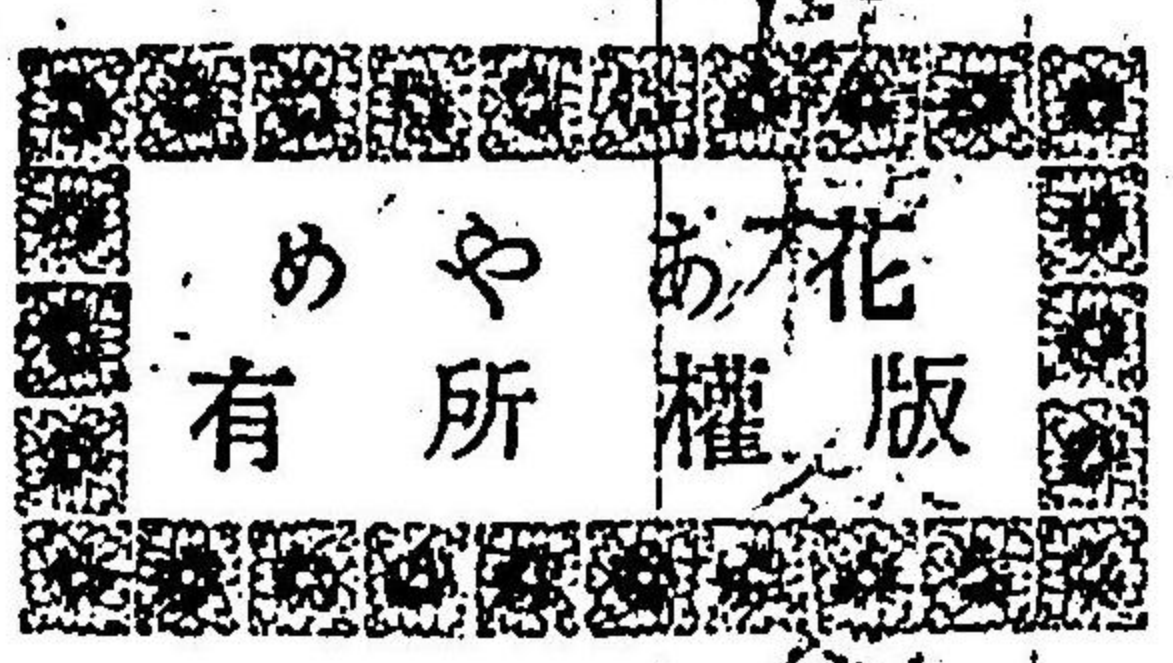
明治廿五年六月廿五日印刷
 明治廿五年六月廿日出版

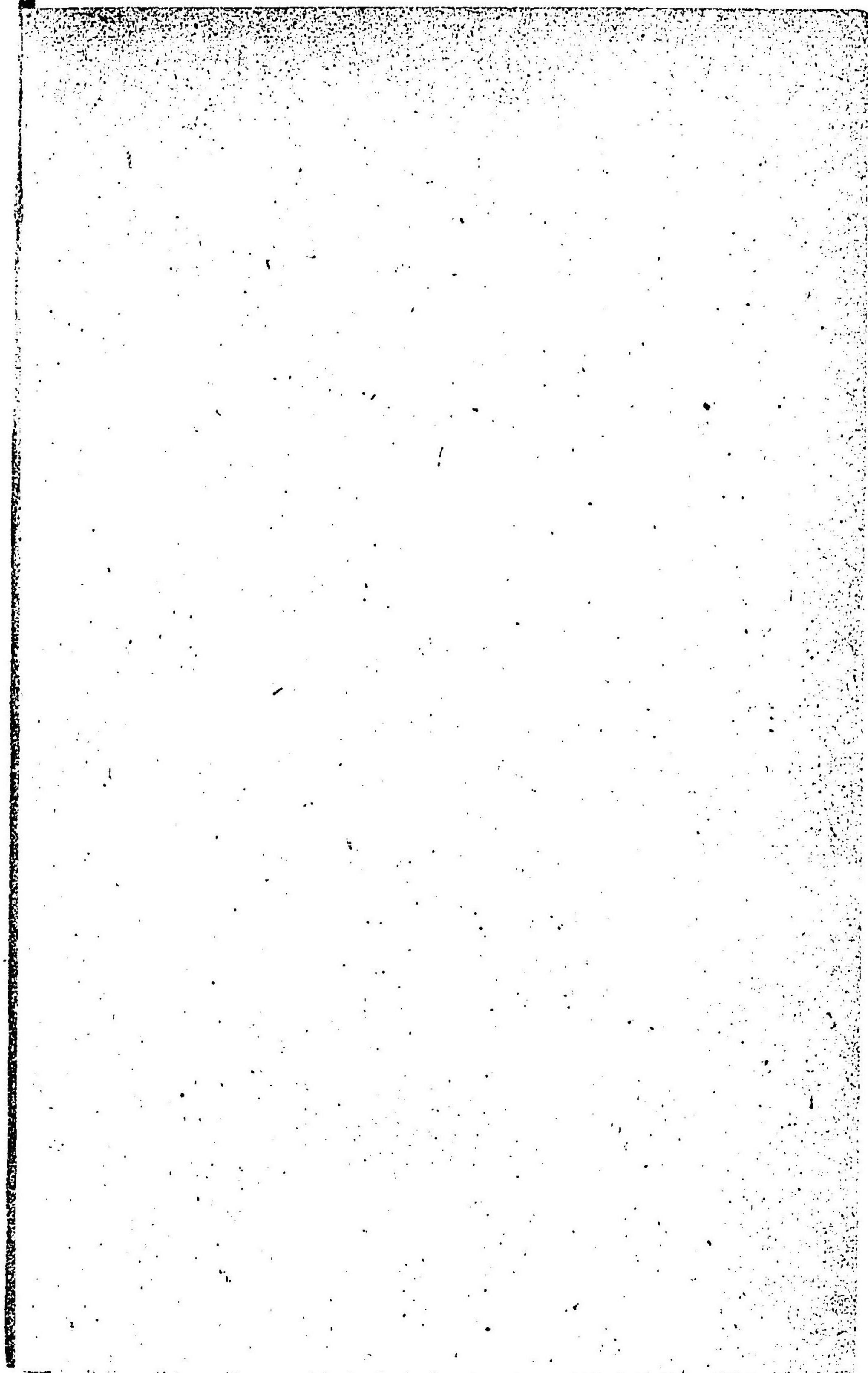
定價金拾三錢

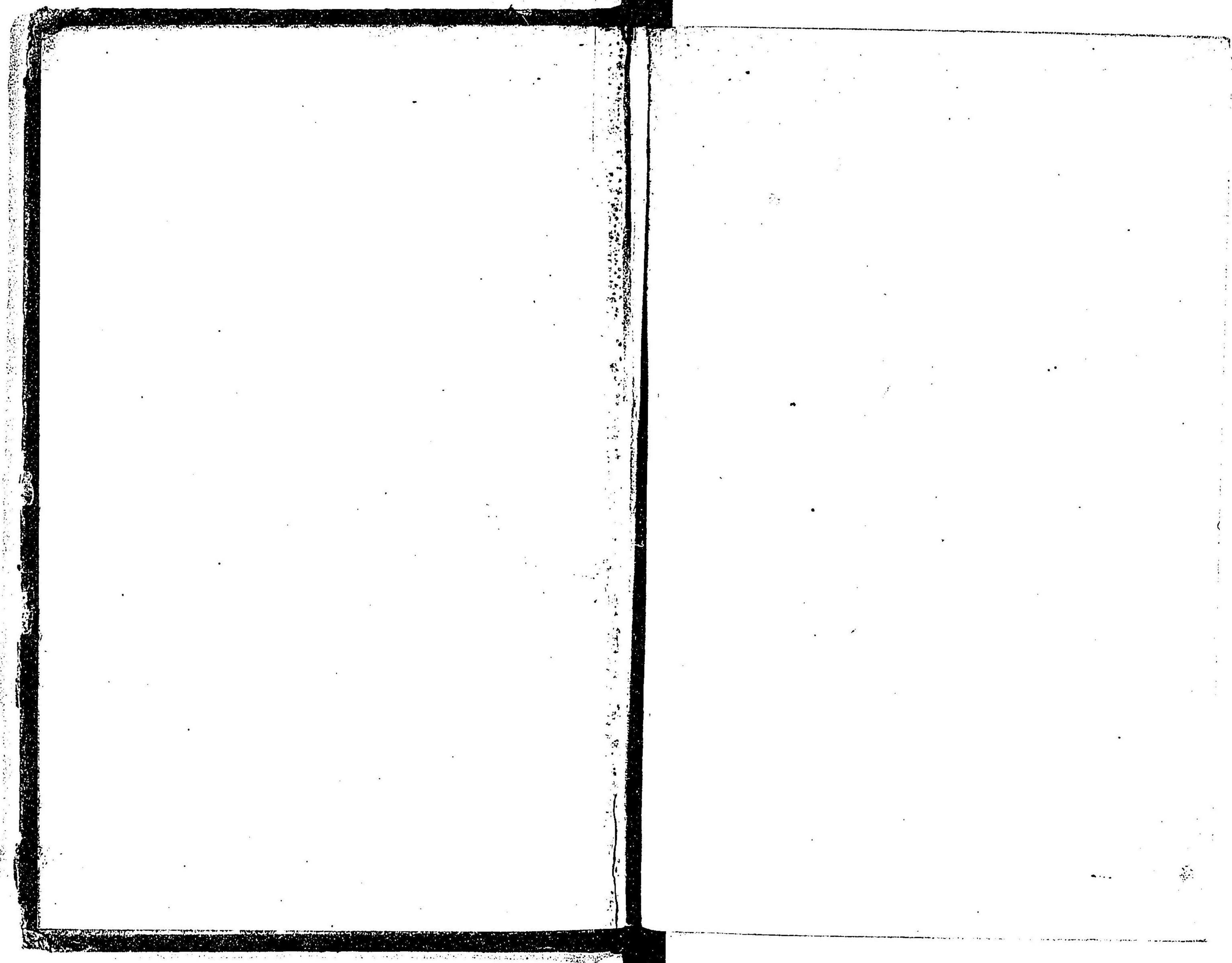
編輯者兼 筒井民治郎
 日本橋區新和泉町壹番地

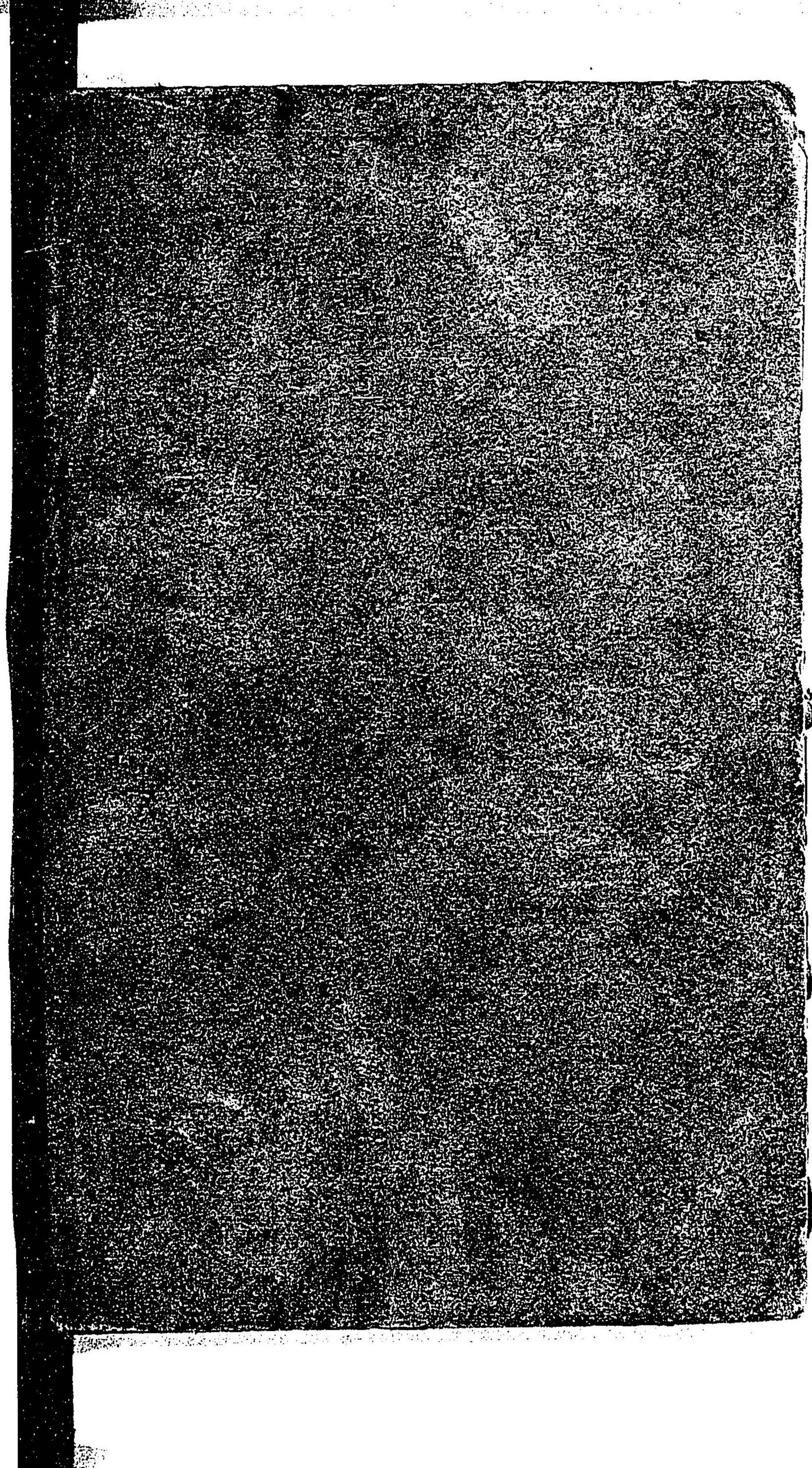
印刷者 瀧川三代太郎
 日本橋區新和泉町壹番地

發兌 今古堂
 日本橋區新和泉町壹番地











094976-000-3

特10-259

花あやめ

半井 桃水/著

M25

DBQ-2572

